



1999

賀  
正  
一

# A HAPPY NEW YEAR

私の生まれた町は、すべてが灰色だった。道も、ビルも、ときおり見かけられる看板の類も、町並みにそって規則正しく植え込まれたボブラの街路樹でさえ灰色の空気に染まって見えた。町の中央をまっすぐによこぎって走る幅広い道路のかなたに見える遠い山々はあまりに遠すぎていつも霞がかったぼんやりとした風景だった。そんな灰色の町にも、年の瀬にはあわただしく人の行き交う活気に満ちた町があらわれる。町のあちこちの市場にあふれるものや人、買い物をすませて家路を急ぐ人達、車の警笛の行き交う道路の喧騒。町中がやっと正月支度を終えて、大晦日を迎えた夕刻からはまたいっそう静かな灰色が町にもどる。

年が明けた正月元日は、おもてに出てみると町には人影もなく門戸の閉ざされた家々に掲げられた日の丸国旗が、灰色一色の町に赤い絵の具を点々と落としたように鮮やかに、整然としたコントラストで、新しい年を迎えていた。

鎌倉の正月は彩りに満ちている。大晦日の深夜には山と海に囲まれた町のあちこちの寺からの除夜の音が暗闇の中にいつまでも鳴り響く。それを合図に初詣の人たちの人並みがあらわれる。正月支度をした参道の飾り付けと訪問者たちのはなやかな晴れ着、手にした破魔矢の彩りが、町の正月をいっそう盛り上げる。

美しい日の出の光を映す鎌倉の海は、まだ冬の色だ。重く暗い鉛色の水銀を敷き詰めたように静かな空と海。もう一月もすれば、海にも春が訪れるだろう。あたたかい碧がかった水色に染まる春の海。もうすぐ、春。春が来たら・・・春になれば・・・春になれば・・・



## COLUMN

ほっそりした顔立ちの、背が高く、足も手も長い人でした。ひょうひょうとして、いつもいたずらっぽいことを考えてばかりいた。ある年の夏の日、みんなで家を訪れたとき。玄関には鍵がかかってないしきつと家にはいるはずなのに、どこにもいない。すると、どこからか『なぁーに？』ってけだるい声。声のするほうを見ると食卓の床に足が二本とびだしている。なんとテーブルの下にながながと手足をなげだしてねそべっていた。『ここが、いちばんすずしいわ』だって。うん。たしかにすずしそう。入院してからも、病室のみんなをよく笑わせていた。お医者様からむずかしい話を聞くときも、ベッドに長い足をなげだして顔を斜めにかたむけて聞いていた。モジリアニのひとのように。入院してから時間がいっぱいあって、いろんなことを話し合った。治療でからだがつらいときも、やっぱりいたずらっぽくてやさしかった。もっともっとこんな時間がもてるとおもっていました。こんなに早く。いってしまうなんて。ねえさん。わたしはあなたのことが、好きでした。春を待たずにいってしまった、ねえさんへ。ふみこより